A recollection of late professor Hajime Okamoto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8529

岡　本　肇先生を偲んで

A recollection of late professor Hajime Okamoto

金沢大学がん研究所免疫生物部
高　橋　守　信

岡本　肇先生には，かねて病気療養中のところ，去る4月8日午後1時半，老衰のためご入院中の金大医学部附属病院にて逝去された．享年91歳であった．先生は数年前から体調をこわしておられ，ご高齢のこともあり，お別れする日が来ることは覚悟してはいたものの，いざ，その日が来ると，悲しみと共に思いもかけない喪失感に捉われたのであり、一つの時代が終ったことを痛感させられたのである．

先生は昭和43年ご退官になられたので，医学部，がん研究所でも50歳以下の人たちは先生のご事蹟をご承知ない方も多いと思われる．

金沢大学医学部百年史などから引用してみよう．

先生は明治35年8月1日生まれ．小松のご出身である．昭和2年金沢医科大学（金沢大学医学部の前身）をご卒業，直ちに薬物学教室に入り，同6年5月助教授，同16年1月同教室に付設の結核研究施設教授，同17年以降結核研究所薬剤部主任，昭和29年6月医学部薬理学教授，29年から33年まで結核研究所長兼任，昭和35年4月から38年3月まで医学部長，昭和38年9月からは医学部附属がん研究施設長併任，42年5月金沢大学がん研究所発足と共に，初代所長に就任された．この間，越村三郎元がん研所長，正院　達元医学部長を初め，多くの研究者を育成され，昭和32年5月には「核酸による溶血性連鎖球菌の溶血素増産現象の発見について」の研究によって日本学士院賞を受賞された．先生の退官近い頃のお仕事としては，越村教授らとの協同による溶血性連鎖球菌製剤による抗癌作用の研究がある．研究は，いわゆる免疫賦活型抗癌剤の先駆となったOK432となって結実した．OKには岡本，越村両先生の名前から由来する．OK432についての内外の研究論文は，先生がまだお元気な昭和50年代の初めに2000を越えており，その論文リストをうれしそうに見せて下さった先生の温顔が，つい昨日の様に目に浮かぶ．

先生は研究者，研究指導者として，稀に見る優れた素質と見識をお持ちの方であり，それがなによりも先生の魅力となって，多くの人を動かした．結核研究所時代に，次の研究所の研究のターゲットをがんに絞ったこと，がん研究を，生命現象の根本的理解と結びつける研究として把握したこと，金沢大学医学部の発展のために，広く人材を全国から集められたことなどは，その現われであった．小生は昭和38年から40年にかけて，東大伝染病研究所の大学院学生だったが，高木，関口，松原，亀山，石浜，大村などの諸先生を擁して研究の最先端を進む金沢大学医学部が光り輝くように見えたのを覚えている．がん研究所設立に当っては，当時，同様にがん研究所の設置を希望する名古屋大学医学部との間に，激烈な競争があったという．その競争に打ち勝って，国立大学附置研究所として唯一のがん研究所が金沢に設置されたのは，明らかに先生のリーダーシップによるものである．昭和42年9月の金沢大学がん研究所創立記念式において，先生は所長として次のようなあいさつをされた．「いま，がん制圧が人類の悲願であり，しかも，この混沌の研究領域が，いわゆる生命の科学に深く密接していることに思いを致す時，がん研究にはまさに人間の叡智を不巧に導くものが含まれているといえましょう」．がん研究を既存の知識の寄せ集めによる応用研究ではなく，生命の根源的理解に結びつく生命科学として推進しようとされた先生の方針は，その後のがん研究所の研究方向を明確に示されたものであった．

先生の学問に対する熱情と，先生が育成された金沢大学医学部，がん研究所に対する愛情は，最晩年まで衰えることなく持続された．

先生は全ゆる公職を退かれたあとも，日課のように宝町キャンパスのいくつかの教室を訪ねられ，談論を楽しまれた．何気ない話の間に，寸鉄人を刺す鋭い批評，深い洞察が含まれ思わずはっとすることがあった．先生は最後まで，惜しみなく智慧を与えて下さる恩師であり続けた．先生は度重なる多額の寄付を医学部，がん研究所にしていただいた．がん研究所では，岡本記念コロキウムやがん研セミナーなどで内外の研究者を招いて講演する際のほとんど唯一の資金源として，現在でも大切に使わせていただいている．

自然科学者の業績は忘れられ易い．平成3年9月，英紙サンデー・タイムスの8週連続の特集記事「20世紀に影響を与えた1000人」の中に，日本人科学者は1人も指名されなかった．岡本先生の業績についても忘れられる日が来るであろう．しかし，先生が私たちの心に残した感銘は，私たちが生きている限り残る．また，先生の高い志は，医学部，がん研究所の伝統として生き続けるであろう．